

カウンセリング

白いテーブルの上にハーブティーが出されていた。濃いピンク色のローズヒップだ。

笠原^{かさハラ}柚季^{ゆずき}はそのティーカップを一口すすただけだった。

「ではまず、あなたのことから聞かせていただいていいですか？」

「はい」

柚季は緊張しながら答えた。こういうところに来るのは初めてだった。がらんとした部屋の中央に白いテーブルが置いてあり、カウンセラーの先生と向かい合わせに座っていた。彼女の前にもハーブティーが置かれている。種類は同じローズヒップだ。

目の前の女性は心理カウンセラーの篠原^{しのはら}響子^{きょうこ}だった。その名刺が柚季の目の前に置いてある。

「お名前は……笠原柚季さんですね、年齢は、三十三歳……」

響子は訊いているのか、独り言で言っているのか分からない感じで言った。柚季はとりあえず「はい」と答えた。

この先生は経験が長いのか、それともそういう話し方なのか分からないが、少し上から目線で横柄な態度だったのが引っ掛かった。冷めた印象があるのは話し方のせいだろうか？

だが、まだ何も話してないので、響子の力量は分からない。どこまで自分の気持ちに寄り添ってくれるか、そこが重要だった。

響子は家族構成とか、現在の状況をヒアリングし、柚季の情報をノートに書き留めていた。「それで、今日はどんなご相談ですか？」

やはり高圧的な態度で訊かれた。柚季は来るところを間違えたかと、少し後悔しながら悩みを打ち明ける。

「実は……ウチの主人のことなんですが……」

「はい」

「不倫をしております」

彼女はここまで来たら打ち明けるしかないので、話すことにした。

「不倫？」

「はい」

「それは確定なんですか？ 探偵を使って調べたとか？」

「いえ……」

「じゃあ、どうして不倫だと言えるんですか？」

間髪入れずに訊いてくる。柚季は少し気おされるような感じで答える。

「その……見てしまったんです」

「あなたが不倫の現場を、ということですか？」

「そうなんです」

「はあ、なるほど。そういうことですか」

響子はまたノートに記入する。

「それは具体的にどんな場面を見たんですか？」

答えにくい質問だった。それを言葉にするのは、とても恥ずかしかったが、言わなければ話が進まないし、ここへ来た意味がない。響子の言い方は高圧的だが、聞いてもらわなければいけない話だ。

「その……愛し合っているところといますか……」

セックスをしている場面だった。そういうことを女の口から言うのは、非情に恥ずかしいのだが、今の言葉だけで察してくれないかと期待した。

だが響子はその先を促すように、口を噤んで、柚季が話すのを待っている。

「男女が、一糸まとわぬ姿で……」

「なるほど。わかりましたが、それはどんな状況であなたがそれを目撃することになったんですか？ まさかラブホについていったわけではないですよね？」

そういうことか……彼女はそれを訊きたかったのだ。

「はい、ホテルとかではなくて、我が家で……」

「ご自宅で？」

それには少し驚いたようだった。

「夜になって私が寝静まってからのことなんですが……」

「自宅に女を連れ込んでということですか？」

「いえ、そうではなくて……、その相手というのは実の母なんです」

柚季がそう言うと、響子は一瞬言葉を失くしたように絶句した。

「お母さんと……。それはどちらの？ あなたの？ それとも……」

「私の、です」

そこは柚季がはっきりと答えた。

「ああ、なるほど。そういうことですか。それはちょっと驚きましたね。あまりあるケースではないですね」

「はい……」

当然だろう。普通不倫と言ったら、外で相手を見つけてパートナーには内緒でするものだ。だが、柚季の場合は違った。自分の夫と、柚季の母が体の関係を持っているのだ。しかも柚季が家に居る状態のときにだ。

柚季はそれを事細かく説明した。響子は黙って聞いていて、ノートにペンを走らせている。

「普通なら、あなたが不在のときにこっそりするものですよね？」

「そうなんです。不倫も赦せないですけど、そこが解せないんです。なんでわざわざ私が家

にしているときしているのか」